

コーヒーポットを舵に持ち替えて

— ある喫茶店マスターの漁業への挑戦 —

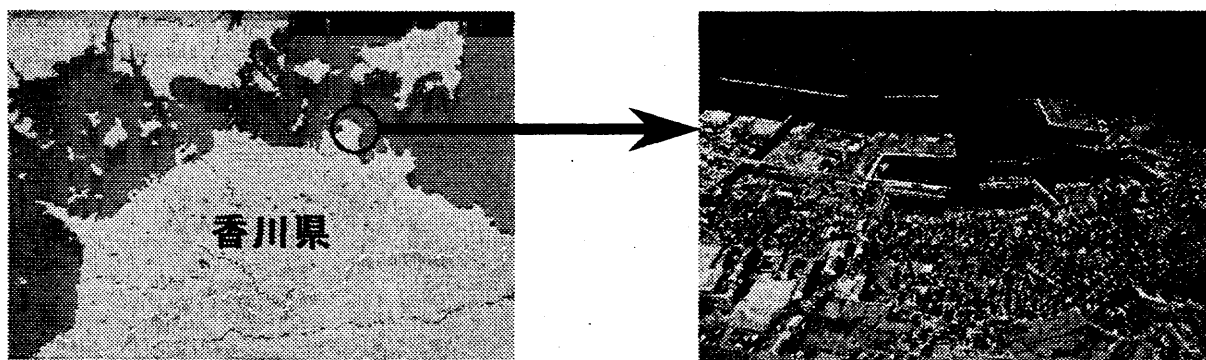
庵治漁協小型機船底曳網漁業部会

藤本 守

1 地域及び漁業の概要

私の住む庵治町は、四国本土の最北端に位置し、高松市の北東約16km、屋島湾と志度湾に挟まれる形で、備讃瀬戸に突き出した半島にある。基幹産業は、漁業と石材工業で「石と魚の町」として発展してきた。漁業は、小型底曳、敷網、刺網等の漁船漁業のほか、ハマチ・マダイ等の魚類養殖が盛んである。

庵治漁協の組合員数は374名で、平成10年度の生産金額は、漁船漁業9億9365万円、養殖業21億785万円となっている。



地域の概要

2 小型機船底曳網漁業部会の概要

本部会は、小型機船底曳網漁業の許可を有する111名で組織され、会長ほか約25名の役員がいる。部会の運営は会費、親組合からの助成金、寄附金等で賄われている。主な取り組みは、漁業資源の維持培養を図るため、クルマエビ、ヒラメ等の種苗放流を行ったり、環境保全対策として海面や海浜の清掃も行っている。また昭和61年度からは全国に先駆けて週休2日制を導入し、積極的な資源管理に努めている。

3 漁業者を始めるまでの経緯

私が庵治町で漁業を始めるに至った経緯は波瀾万丈そのものである。坂出市与島に生まれ、小学校4年生まで島で暮らした。与島と言っても実家は全く漁業とは関係なく、父は雑貨運搬業を営んでいた。たまに近くの漁業者に漁船に乗せてもらうこともあったが、将来自分が漁業をやるなんてその頃夢にも思っていなかった。5年生の時、母の里である庵治町に移り、18才まで過ごした。その後訳あって大阪市内の会社に就職。しばらくして兵庫県内の女性と結婚し、公私とも安定した

日々を送っていた。ところが、少年の頃からの夢であった喫茶店経営への思いが捨て切れなくなり、たまたま神戸市内で散髪屋を営む小学校時代の同級生の紹介もあって、昭和53年、同市兵庫区内に店舗兼住宅を構え、そこで夫婦2人で喫茶店を始めることになった。

店の経営は思いのほか順調で、固定客も相当増え、「これが私の天職」との認識を強くしていた。ところが、16年後の平成6年、高齢化した両親の面倒をみるため、止むを得ず喫茶店を断念、家内と相談のうえ庵治町に戻ることになった。

庵治町に帰ってしばらくは、職捜しを兼ねて、家でゆっくりとしていたが、それを知った近所の漁業者の方が、「暇やったら一回遊びのつもりで沖に出てみんかい」と言ってくださった。もともと庵治町出身と言えども約30年経っており、多少なりとも様子は変わっていた。自分から地域に溶け込む絶好のチャンスと判断、気楽な気持ちで、小型底曳船に乗船し、庵治の漁港を後にした。

漁場に到着した頃は、既に日は沈み周囲は真っ暗。船頭さんは手際よく長い張り竿の付いた網を海中に投入。約2時間ぐらい漁船で引っ張ったあと、ローラーで網を巻き上げていった。袋網にはエビ、カレイ、ゲタなど多彩な魚が見られ、たいへん興奮した。

季節は晩秋でもあり、夜中はかなり冷えてきたが、網が揚がるたびに、ピチピチと跳ねる魚に目を奪われ、寒さは全然気にならなかった。6回網を曳いたあと、翌日の午前5時に帰港、魚市場への陸揚げを手伝って一休みした。その後、何度か乗船するにつれ、「ひょっとしてわしにもできるかもしれん。やってみようか」との思いが強くなった。胸のうちを家内に明かしたところ、「また、悪い癖が始まった。見るのとするのはえらい違いや」と家内はけん制したが、最後には「好きにしたらええが」と言って半分諦め顔で賛同してくれた。

今思えばこの時が私の漁業修業への始まりであった。最初とは別の漁業者の方にも無理をお願いし、2隻の漁船に交互に乗せてもらい、底曳網漁業のノウハウを徹底的に教わった。簡単そうに見えた漁具の扱いにも結構てこずり、船上の作業は常に危険と隣合わせにあることが分かった。そうこうするうち、あっという間に一年が経過し、平成8年12月の理事会にて、理事の皆さんのご好意により、乗船期間を出漁日数として認めていただき、晴れて庵治漁協の正組合員となることができた(通常120日を超える操業日数が必要)。そして漁業者としての人生をスタートさせた。

4 実践活動の状況

就業してあっという間に3年が経過したが、とにかく毎日が勉強である。漁は家内といっしょに出かけるが、操業中の身の安全をはじめ、全てが自分ひとりの腕にかかってくる。

最初は適当な漁場も分からず、仲間に場所を教えてもらったり、仲間が網を入れた後に続けて自分の網を入れて操業を勉強した。エビやゲタなどが一杯網にのった時は驚きであった。一番困ったのは、漁場の海底の様子と潮の流れが全く分からなかったことである。漁船の運転には多少なりとも自信があったが、網に障害物を絡ませて船が動かなくなったり、曳網中に網をひっくり返したり、はたまた漁船を小島にぶついたり、とにかく冷や汗のかきっぱなしであった。それでもたいへん有り難いことに、その都度、操業中の仲間がわざわざ漁を止めて助けにきてくれ、なんとか事無きを得てきた。また、夜間の海上の灯りにも悩まされた。大型船舶なのか、街の灯か、目で見てもさっぱりわからず、沖で灯りを見つけるたび緊張した。最近になってようやく何か見分けがつくようになったが、瀬戸内海では、当て逃げによる漁船の事故は一向に減らず、油断はできない。

そうしたなか、心が癒される瞬間もある。早朝、東の方向に見える日の出の光景。陸ではこれほど感動させられるものはなく、何度見ても飽きない。

また最近では携帯電話が普及したお陰で、天候が悪い時など、神戸に嫁いだ娘が心配して、夜沖合いで操業中の私たち夫婦に電話をしてくることがある。娘の声を聞くと、海の男としてはなんとも情けない話であるが、すかさず操業を止めて帰り支度をする。

5 波及効果

喫茶店経営から小型底曳網漁業へという全く畑違いの転職であったため、当初はまわりの漁業者から「いつまでもつんやろ」と興味本位で見られている面もあった。それでも漁協や仲間の人たちのご支援もいただいたお陰で、何とか年間700万円程度の水揚げをするまでになり、今では自分で自信のもてる漁場もある。こうした取組により、漁業者の私に対する見方も少し変わり、今では本音で私とつきあってくれるようになった。

私自身、自然の成り行きで漁業をやることになったが、見方によっては、漁業はたいへん魅力的な商売だと思う。3Kと言われ、若い人たちにはとかく敬遠されがちであるが、自分の甲斐性が直接反映され、サラリーマンのように、複雑な人間関係に悩まされることもない。また、近代化資金や無利子の改善資金など融資制度も充実している。陸上の自営業者にはこんな恵まれた制度はないと思う。

全国的に漁業後継者不足が深刻化するなか、私の事例を知った県では、今年から新規の漁業就業者を確保するための窓口を設置したと聞いている。

考えると、私の場合は地元の出身でもあり、よき仲間、理解ある親組合など、就業しやすい環境にたいへん恵まれていた。だから、全然本県に関係のない人がこちらで漁業を始めるには、いろいろな点で、かなり厳しい面があるかと思う。それでも、ひとりでも他の職業から漁業に転職する人ができれば私もうれしいし、また私自身も同業者として、そういう人をできる限り支援していきたいと思っている。

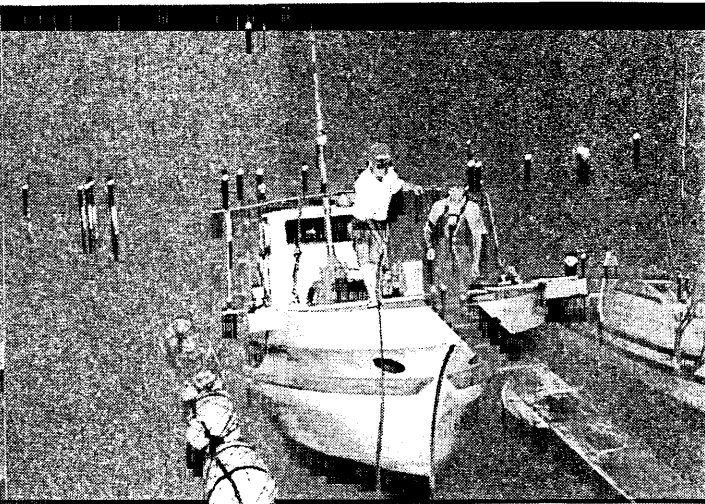
6 今後の課題

先ほどお話ししたように、水揚げについては、小型底曳業者の平均的レベルまでいけるようになったが、底曳のみの経営で、まずまずの生活水準を維持するには、最低でも1000万円の水揚げが必要と思う。ただ近年、資源の減少に加え、魚価が低迷している現状では、漁業者が率先して何とか手取りを増やしていく手だてを考え、それを実践していかななくてはならない。喫茶店を営んでいるだけに、常にそのことが気にかかる。

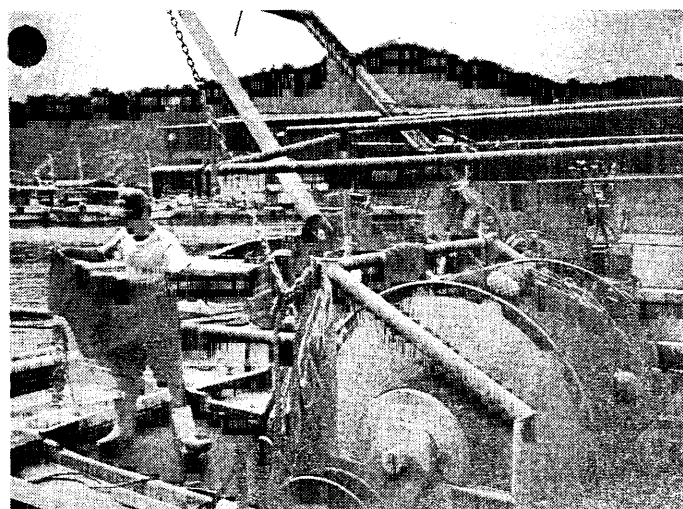
最近、小型底曳網を営む友人数名で、相互の情報交換などを通じて親睦を深めているが、そうした課題に対処するため、自分たちの漁獲物を、試験的に組合を通じて地元のスーパーや関西の市場等に販売し、手取りを増やしていく方法を模索している。この試みは、当面続けていこうと思っているが、こうした取組の成果を少しでも、地域漁業の活性化、ひいては後継者対策の一環に生かしていければと思っている。



喫茶店（神戸市内）マスターの時代



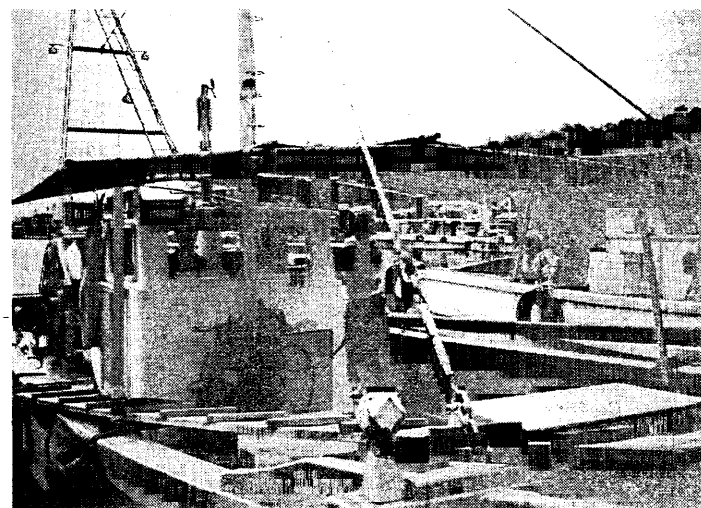
早朝、漁を終えて帰港



漁に備え網の点検をします



夫婦で生け間ごとに魚を箱詰めします



準備を終え、午後夫婦でいざ出漁



獲れたゲタをていねいに並べます